



## NS との共同作業としての 辞書づくり



原川博善

『ジーニアス和英辞典』第3版は、用例執筆の時点から初校・再校の校閲に至るまで、すべての段階で「日本語を母語とする人」(以下日本人)と「英語の native speaker」(以下 NS) がペアで仕事をして作られました。多数の NS と日本人の協力を得た大事業で、これに伴う編集部の仕事量も並大抵ではなかつただろうと思われま

す。用例執筆は NS と日本人それぞれ40数名がペアを組んで行い、上げられてきた原稿は校閲ペア(数組)が検討を加えて編集部に送ります。用例執筆と並行して、それを参考にしながら英語中見出しの執筆が行われ、次いで用例と中見出しを統合する「まとめ執筆」によって見出し項目としての体裁を整えます。

その後、初校校閲、再校校閲と進み、その間に高校などの英語教員(十数名)と編集部および外部の編集協力チームによるチェックも受けつつ、校閲ペアが加筆修正を施し、語法や表現に関する囲み記事や図表が組み込まれて、最終版の出来上がりとなりました。

### 用例の校閲

英語用例の校閲にあたっては、それが日本語用例にぴったり合った表現であるかどうかをまず点検します。NS が OK を出した英語表現でも日本語に十分対応していないものが見受けられました。たとえば、「雲間に青空がのぞいた」の英訳例 A patch of sky was seen. の場合、「雲間に」が表現されていないので、A patch of sky broke through the clouds. のように修正して日本語と合

わせませ

わせます。また、英訳にあたって発想の転換が必要な場合などは次のように日本語の言い換えを示します。このようにすれぼうまくいく If you do it like this, you can make it.; [=これがやるべき方法だ] This is the way to do it.

### 英語中見出しと用例の示し方

中見出しは通例複数あげられ、その場合意味用法のふつうのものを先におき、それぞれの違いがわかるように意味の要点を「小見出し」( ) で示すようにしました。

例えば、**たずねる** [訪ねる] の項の中見出しでは、次のように文型や目的語の違いも簡潔に示されています。

**visit O, pay [make] a visit to O**; (短時間訪問する) **call on O** (◆O は人), **call at O** (◆O は場所)

用例は原則として中見出しの順に、句用例が先、文用例が後に来るように配列されます。

**秋の京都を訪ねる** visit [pay a visit to, make a visit to] Kyoto in fall / **帰宅途中に彼女の家を訪ねた** I [called at [visited] her house on my way home.

この「中見出し」と「小見出し」の示し方、用例の順序ひとつをとっても、そこに落ち着くまでにさまざまな提案と意見交換があったことが思い出されます。

このほかでは、PC (politically correct) にも留意して中見出しを挙げています。例えば第2版

のきしゅ [騎手] の項で

horseman 馬術選手 ((PC) (horseback) rider) と記載されていた部分は、第3版では次のようになりました。

(乗馬者) (男性) horseman [C], (女性) horsewoman [C], (性別に関係なく) (horseback) rider [C]

### 用例の執筆から校閲、最終稿まで

作業経過を示す具体例を2例紹介します。

(A) 終電に滑り込みで間に合った I just made it to the last train.; I barely managed to catch [get into] the last train.

校閲者とNSのやり取りを再現してみましょう。執筆ペアから送られてきた翻訳2例 I just made the last train.; I almost missed the last train.を見て、

校閲者：前の文はいいけど、後の文は「もう少しで終電車に乗り遅れるところだった」の意味だからここではボツにして、前の文と I barely caught the last train.でどうだろうか。

NS：万能語の made を使った方の用例はいいとしても、やっぱり「滑り込みで間に合う」を文字通り表す用例もほしいね。I was just in time to slip into the last train. としようか（ここで slide は使えない。まるで野球のように滑り込んだことになるからね）。

校閲者：でもそれでは「もう少しで乗り遅れるところだった」のニュアンスが出ないよ。barely を生かして I barely managed to slip into the last train. あたりでどうだろうか。

その後、編集委員のところではつぎのようなひとり言が聞こえます。「この make the last train は make it to the last train とするともっと口語的で応用のきく表現になるかな。slip into は捨てがたいけれど、ここは「終電車に間に合う」の意味でもっとふつうの catch [get into] the last train に置き換えて使いやすくしておこう。これ

でよいか NS に相談しよう」

あらまし以上のような経過をたどって最終稿となりました。

(B) ぬかるみで新しい靴が台なしになった My new shoes 「were ruined by [got dirty in] the mud. 《◆前者は「元の状態に戻らない」、後者は「表面が汚れただけ」のニュアンスを持つ》

ここも実況中継で。

[執筆ペア] 執筆者：「ぬかるみ道で新しい靴が台なしになった」か、これは簡単。The muddy road has ruined my new shoes. でできあがり。これでどう？ NS：うん、いいね。

[校閲ペア] 校閲者：英語はこれで問題ないけれど、もとの日本語では「新しい靴」が話題になっているから、ここは主語を My new shoes としたいね。NS：それなら My new shoes got ruined by the mud. とすればいい。

というわけで、これで一歩日本語文に近づきましたが、このあと「台なしになる」は2つの解釈ができることを考慮して、上掲の決定稿となりました。これによって前置詞 by, in の使い分けなど用例に幅が出たと思います。

### 蓄積された資料

執筆・校閲ペアのやりとりは、直接会って行う場合もありましたが、多くはEメールで進められました。その過程で、日英語の表現や考え方の違いなどについて、さまざまな新しい気づきがあり、共同作業の難しさとともに面白さも実感することができました。

今回の用例増強作業で蓄積された資料はかなりの量に達します。第3版に掲載されなかった用例をはじめ、ペア作業の中で明らかになった日英語の表現や考え方の違いについての知見が、次の機会に活用されることになればよいと考えています。

(はらかわ ひろよし・平安女学院大学短期大学部教授)